

生涯学習まちづくりの推進方策に関する考察

—市民活動を促進するための、行政による効果的支援の取り組み—

福留 強

はじめに

(1)本研究の経緯

「生涯学習まちづくり」は、臨時教育審議会答申以後、いわゆる生涯学習体制確立以後の、日本独特のまちづくりの考え方として広がってきた。これは、生涯学習の総合的な推進方策として理解されてきた。しかし、現在では生涯学習の効果的推進というより『まちづくりの効果的な手段』として理解されるようになり発展している¹⁾。

近年、小規模自治体の中に、特色あるまちづくりの柱として、「生涯学習」を位置づける傾向があった。しかし、平成の自治体の大合併により、その規模が大きくなり、「生涯学習によるまちづくり」の考え方や推進について、新自治体として一本化することの困難性が見られる。これは生涯学習宣言都市などにとりくんだ自治体の首長の交代や、自治体の生涯学習に関する理解の度合いの違いや推進方法の困難性があるからである²⁾。

(2)本研究の内容

これまで、生涯学習まちづくりの動向について、全国的な取り組みの傾向、国の政策と自治体の反応などを分析・検討してきた。本研究は、その継続として、以下のような構成・内容で、推進方策のあり方について考察するものである。前稿ではこのうち、「生涯学習まちづくりの意義と目的」、「生涯学習まちづくりの推進に影響を与えた方策」、「生涯学習都市への発展」等について検討した³⁾。

本研究では、前6号に続いて、以下の項目について検討するものである。

4. 生涯学習まちづくりの推進方策についての考察

- (1)生涯学習まちづくりの前提条件
- (2)生涯学習推進計画に見る「生涯学習まちづくりの推進施策」の概要
- (3)事例「過疎地の無人駅が輝かせた住民の力」
- (4)市民を主役にする行政の効果的な役割

(5)今後の具体的な方策と、行政と市民が相互に期待されること

1. 生涯学習まちづくり研究の前提と方法

(1)問題の所在と仮説

①問題の所在

今日、財政難において、生涯学習関連の予算は、各自治体において削減が続いている。こうした中で、まちづくりの実態もイメージだけでなく、ハードからソフトへと変わりつつある。さらに、生涯学習まちづくりは、生きがいに役立つなど、その具体策の一つとして注目されている。現在、「限界集落」の用語が生まれるほど、過疎地における地域づくりは、絶望視されるほどの困難な場面に直面している。そうした中で、「生涯学習の推進」は、過疎地において高齢社会の活性化に効果を発揮するのではないか。

実際に、そうした中でも、住民の学習で過疎化が克服されるということが可能であることが示されている事例もある。そこには、いくつかの課題解決の方法が含まれているものと考えられる。これらの事例を分析することによって、新しい地域づくりの可能性が見出されると思われる⁴⁾。

本論では、あらゆるまちづくりの要素と、活性化、行政支援のヒントなどを有すると思われる鹿児島県霧島市隼人町嘉例川地区をモデルにしてとりあげ、それをもとに次のような仮説により考究することにする。

- 地域の活性化には、地域資源を活用することや、優れた指導者の存在が不可欠である。それは日常的な活動の中から成長するものである
- 優れた指導者として、外部の助言者、客観的な活動の指針を提示することで、地域の活性化は実現可能となる
- 地域の活性化には、地域のあらゆる関係機関の連携が必要である
- 住民の学習が、一定の行政施策としても、より効果的な行政効果を生み出している

②本研究で検討したいこと

- a. 市民活動の実際として、過疎地を活性化した嘉例川地区の取り組み事例と、地域の活動の要点をまとめる
- b. 市民の自主的な活動を、行政としてどのような支援が効果的で可能性が高いかを検討する
- c. 限界集落と言われる地域に対して効果的な支援方策があるか。支援方策が効果をあげるためには、地域にはどのような条件が必要かを考察する
- d. その場合、市民、行政がどのような協働するネットワークを構築すれば良いか明確にする

③研究の方法

- a. 過疎地で成功している嘉例川地区の事例を、現地調査し、その現状と問題点を分析することを試みた。また、地域で調査したこと、及び、研修事業に参画した資料等を整理分析する。さらに関係者の聞き取りをもとに記録を行った。
- b. 調査は、文献・資料の検討、現地における関係者との懇談、研修資料、記録を整理して検証した。

(2)生涯学習推進計画に見る生涯学習まちづくりの推進施策の概要

①生涯学習まちづくりの前提条件 「生涯学習まちづくり」の捉え方

平成18年12月に改定された教育基本法では、初めて生涯学習の理念として第3条に「生涯学習」が謳われている。教育基本法にある「自己の人格を磨き」は、「自己の向上」を目指すこと、生涯学習の目指すところである。また豊かな人生を送れるよう、生活を高めることとあわせて、これまでの生涯学習関連の各答申でも提言されてきたものとはほぼ同様のものである。教育・文化・スポーツ、ボランティアなど様々な生涯学習の結果、個人が高まり、さらに、市民全体が高まるということが、コミュニティ形成には不可欠である。これが、「まちづくり」そのものを意味しているといえる⁵⁾。

「市民が主役のまちづくり」は、市民が関わるということが、理解されるようになってきた。従来の「ハード」づくり中心のまちづくりから、これからの「まちづくり」は、「コミュニティ形成」や「市民の学習機会の充実」や「指導者の養成」「学習情報の提供」など、いわゆる「ソフト」づくりが主流になっており、行政に関する市民の期待事項と一致している⁶⁾。

平成元年(1989)から、文部省は「生涯学習推進事業」(いわゆる「生涯学習まちづくりモデル事業」)や、自ら考え自ら行う地域づくり事業(いわゆる「1億円ふるさと創生」)な

ど、自治体による自主的・主体的な地域づくり・まちづくりが活発化してきた。

生涯学習まちづくりの発展した形として、生涯学習を全庁的に取り組む「生涯学習宣言都市」も増加し、「生涯学習まちづくり」の啓発事業の実施などで、広く推進されてきたものと思われる⁷⁾。

まちづくりの原則は、あるいは終局の目標は、「市民一人一人が人間的に成長する」、育つということであろう。そのためには市民一人一人が目標を持ち、活動し、生きがいを感じ、学習し、活動することである。それは市民が生涯学習していることを意味する。

それがこれまで述べてきた、一人一人の生涯学習によって、相対的にまちが活性化するという、「生涯学習まちづくり」なのである。生涯学習まちづくりのために、①行政職員が伸びること、行政の活性化、②地域の活性化は市民が育つことを意味する、③民間の団体企業との連携があることが前提条件となると指摘した⁸⁾。

②生涯学習まちづくりの推進施策の概要

生涯学習まちづくりの推進方策の代表的な施策として、「行政内部の推進体制の整備」「生涯学習の啓発事業が充実」「社会教育事業が充実」「学習情報の提供・相談体制の充実」「地域の人材の発掘と活用」「社会教育施設の活性化」「学校教育の機能の活性化」「社会教育団体・グループの活動の活性化」「関係機関・団体の充実と連携」「各種の研修の充実」「まちづくりの長・中期計画の策定」が共通していることについては、前号の研究でも紹介した⁹⁾。

次に、これらの諸施策から、市民が主役のまちづくりの視点から、最も効果があると思われる「市民団体の育成、及び地域との連携支援」について、具体的な振興方策に焦点化して検討する。

以下の事例は、自治体の関与よりは、住民の活動があり、市民団体の活動が連動して地域を活性化した事例であり、その根源は市民の地道な学習にあったといわれている。

2. 事例調査の概要 「過疎地の無人駅が輝かせた住民の力」

(1)嘉例川駅の変貌

九州の南、鹿児島県の中心部。JR肥薩線の嘉例川駅は、霧島市隼人町の無人駅の一つで、住民約200人の小さな集落にある古い駅である、かつて1日の乗降客が2人といわれる、過疎の集落にある無名の駅である。その駅が平成19年5月、「訪ねてみる価値のある駅ベスト10」の第3位(日経新聞)にあげられるほどになっている。九州新幹線「つばめ」の開業に合わせて、南九州の特急「隼人の風」が、嘉例川駅

に停車するようになり、いまでは、週末に多い日には800名近い人が訪れる人気駅になっている。

102年前の九州一古い駅舎が地域のシンボルとなっており、季節の花が飾られ旅人に親しまれている。この駅舎は、駅の機能のほか「ミニ美術展」「ミニコンサート」など素朴な文化発表のセンターであり地域の「創年のたまり場」にもなっている¹⁰⁾。

一見、なんの変哲もない駅であるが、その地に立って、そこで生活している地域の人々の工夫などに接することによって、嘉例川駅の魅力がわかり、「訪ねてみる価値のある駅」を実感するのである。駅から名誉駅長を託されたボランティアの名物駅長も、5分間停車のユニーク特急を途中下車する客のお目当ての一つである。駅前には、公民館の役割をはたす自治会館や、農産物販売所も設置されている。

なかでも販売所は2日間で売り切れる繁盛ぶりである。「毎日開店するわけにはいきません。売れるだけの物を作れません。今でもせいっぱいですから。」と売店を支える主婦たちは言う。これまで地域の高齢者たちは、夫婦2人分の作物をつくれればよかったのが、今では販売のために、地域アニメーターの農作業でも、これまでより多くの生産が必要になっているのである。

町内で惣菜業を営む山田まゆみさんが売り出した1個千円の駅弁「百年の旅物語～かれい川」は、平成19年度、JR九州でも人気NO1弁当になっているという。この駅でもほとんど買えないほどの人気である。

何もなかった駅前に、住民の手によって「嘉例川小さな博物館」ができた。農薬の肥料倉庫だった50m²ほどの土間に半世紀以上前の農具や生活用品など100点を並べ、週末に無料で開放している素朴な手づくりの施設である。それでも地域の人々が持ち寄った展示品が地域の古さを伝えてくれる。

(2) 始まりは町民の学習

さて、こうした過疎地を活性化させ、その契機になったのはだれか。まちの行政の施策ではなく、その始まりは隼人町の諸事業であり、住民の学習であった。

①平成3年ごろ、地元企業の若手オーナーのNさん。まちづくりに関心を持つとともに、有志5人の若者としてフランスの視察をしたのをはじめ、中心メンバーとしてエコミュージアム研究会を立ち上げる。また自社を地域の開放型事務所に拡張、地域博物館に改造して、同志を集めて研究まちづくりやエコミュージアムを研究、実践する。多くの町民にまちづくり参画を提唱する。

②以後、毎年10名近くの町民が、視察研修エコミュージアムの調査見学のため、フランスを訪問している。これらは全て自費参加である。しかも過去十数年も続いているが、全てが主婦たちを中心とする町内の人々なのである。

③仲間を募り、地元若者によるまちづくり研究会「ひまわりの会」を立ち上げ、まちづくり参画や地域行事を実施する。

④さらに地域の起業家、ボランティアを中心に「南風の会」を結成。「南風の生活文化展」を開催。全国対象の公募展として急速に広がってきた。(平成6年合併とともに役割を閉じて閉会)

⑤地元大学(志学館大学)と国立高等専門学校の指導者(研究者)が加わり、隼人エコミュージアムの会が活動を始める。

⑥地域の活性に立ち上がったのは、「隼人エコミュージアムの会」「全国生涯学習まちづくり研究会」など地元の研究会である。これは、嘉例川の土地柄そのものを文化財として考えようという会である。すべてがこのように市民の活動から始まったということが出来る。他の自治体では考えられないほど生涯学習に熱心な市民が多いことをあらわしている。

⑦このような歴史を持つ町民の学習グループが、「エコミュージアム研究会」である。研究会は、構成メンバーは変わるも継続し活動している。現在は、住民から聞き取りをもとに「地域遺産マップ」などを仕上げるべく奮闘中である。

3. 嘉例川地区の住民の活動をめぐる行政の動向

(1) 活動の発展への背景

表1は、嘉例川地区の住民の動きと、その活動をめぐる行政の動きをまとめたものである。いうまでもなく、これらの発展に当たっては、これまで地域には多くの人々がかかわっていることが報告されている。また、嘉例川地区外の多くの地域の人々や、地域のイベントの実践者、研究者等が、早くからかかわっている。そして、今日までの「嘉例川駅」が発展した時点、成果をあげた時点では、顔を見せていないのである。それまでに関わった人々が、以下のように蒔いた種が芽を出し、成長したと思われる動向を知ることができる。

①萌芽期 まちを何とかしたいという若者たちの出現

- ・5人の若者がフランスにまちづくり視察旅行。自費でエコミュージアムを見学

- ・このグループを中心に「ひまわりの会」、さらに女性学習グループ「ウィメンズクラブ」などが生まれ、まちづくり

表1 嘉例川地区をめぐる動向と行政の活動

年度 (平成)	嘉例川の活動経緯	行政の役割 教育委員会等の活動	町内の動向
	1903年(明治36年)1月 開業の木造駅(九州最古)		ライフカレッジ隼人 課題「環境に学ぶまちづくり」
2000 (12年)		町教育委員会市民大学講座と志学館大 学生涯学習センターとの連携事業開始	自然環境を生かしたまちづくり～隼人 町周辺地域を中心に 「エコミュージアムに学ぶ」
2001 (13年)			「隼人学～南九州の地域遺産に学ぶ」
2002 (14年)		文部科学省の生涯学習まちづくりモデ ル支援事業	シンポジウム 「隼人学から学ぶもの」
	地域に関する学習が始まる		「隼人学～南九州の地域遺産と私たち」
2003 (15年)	嘉例川駅100周年記念事業 (九州最古の木造駅舎)開催		資源循環型社会を考える ～地域資産を考える～
	エコミュージアム日仏シンポジウムへの参加 隼人エコミュージアムの会主催で、隼人町と町国際交流協会が後援(フランス シャンパーニュ地方ウイイ町代表4名と嘉例川を語る 駅舎の購入(隼人町)		シンポジウム「隼人学～南九州の地域 遺産と私たち」
	地域住民と隼人エコミュージアムの交 流が活発化 「本の交換市と森の市」開催	JR九州 肥薩線嘉例川 駅舎を購入	
2004 (16年)	嘉例川地区活性化推進委員会 発足 ・特急「はやとの風」の運行開始 ・駅弁「百年の旅物語～かれい川」販売 開始 ・温泉バス運行開始(妙見観光協会と 連携) ・「かれい川ふれあい館開館」 ・「かれい川小さな博物館開館」 ・「榎木孝明とスケッチ散策」と「嘉例 川駅舎個展」の開催 ・「山里の恵みと森のコンサート」の 開催 ・JR九州が名誉駅長を承認。無人駅 では初めて	無人駅への特急の 停車は、国内唯一 地域アニメーター養成講座 以後、駅舎を利用 した個展がはじまる 隼人町・志学館大学・国立鹿児島高専 との連携事業	* 文部科学省の生涯学習まちづくりモ デル支援事業 * 「地域アニメーター養成講座～知域 再発見・発掘講座」の開催 ①中福良地区公民館 ②自主学習会 (文部科学省の生涯学習まちづくりモ デル支援事業) * 嘉例川ふれあい館の収益増 以後駅舎を利用した個展等が活発化す る
2005 (17年)	・観光特急「はやとの風」運行一周年記 念イベント ・自主学習会の実施	地域アニメーター養成講座 「地域再発見講座」	
	・駅周辺に「ハヤトミツバツツジ」の 植樹(地域アニメーター講座での提 案を即実行)。来客を花で歓迎		小学生が里親
	・「もてなしの心 鹿児島最優秀賞」を 嘉例川周辺住民が受賞		・テーマ「隼人学で世界がみえる」(連 携事業)
	・嘉例川駅舎を国の登録文化財へ登録 を答申(18年登録文化財)	・嘉例川駅周辺に関する連絡調整会議	
2006 (18年)	・春のコンサート		
	・JR主催 ウォーキング(春秋)		
	・秋のコンサート	・森のまつりとジョイント 国指定有形登録文化財記念碑贈呈式	
	・彼岸花植栽 ・自分たちが楽しむコンサート		
2007 (19年)	『行ってみる価値のある駅』全国第3位 (日経新聞) ・自分たちで楽しむコンサート		JR主催 ウォーキング春秋

(霧島市教育委員会 山内曜子氏発表資料を基に作成)¹³⁾

について学習を始める

- ・「全国生涯学習まちづくり研究会」単人支部(南九州支部)が活動
- ②まちづくり推進 住民のまちづくり活動が活発化
 - ・平成9年(1997)「南風の生活文化展」が始まる
 - ・「南風人館」を中心に市民の活動が広がる
- ③教育委員会の活躍 「生涯学習課の協力・指導」による団体指導と育成策が見られる
 - ・指導者養成「地域アニメーター養成」などの啓発事業 県内初の事業を実践
 - ・対外的なイベントの実施
 - ・大学・高等専門学校との連携講座の開設
- ④リーダーの誕生とネットワーク
 - ・町内の研修で誕生したリーダー 駅弁を創作した主婦など
 - ・行政の職員の自己研修と指導者の成長(町民としてボランティアでの参加)
- ⑤民間団体の活発化
 - ・「関係機関・団体の連携」 エコミュージアム研究会
 - ・全国生涯学習まちづくり研究会南九州支部
- ⑥「観光・JRの企業戦略」
 - ・鹿児島新幹線の開通に対して、在来線の活性化とJR九州との連携がすすむ¹¹⁾

¹²⁾『生涯学習まちづくりの方法』参照

以上のような背景が次第に嘉例川に波及し、住民の関心を高めていったようである。以下に嘉例川の住民の活動を中心に、地域住民や行政の対応の、その後の記録によって経緯をたどってみる。

(2) 嘉例川地区をめぐる動向と行政の活動

前述の通り、実際は、この活動以前には、単人町にはエコミュージアムを考える素地が育っており、平成12年(2000)以前に、町民のためのまちづくりに関連する事業もたれている。

(3) 嘉例川地区が成功している背景 住民はどうなったか(現状の評価)

嘉例川駅の活性化には、行政が直接多額の予算をつぎ込んだというようなことはない。まさに住民の、長年の学習成果が実ったと言えることのできるものである。

嘉例川地区の例は、人口、資源、予算など何もない「無の状態」から、市民の活動によって、地域の活性化に成功した点に特色がある。ここには、過疎の地域を活性化させるための、様々なヒントがある。その一つ、この活性化の

活動には、他領域、他地域の人材など幅広い分野の人々が関与していることがあげられる。地域の在住の人々だけでは限界があるのである。

こうした中で、嘉例川地区が成功している背景は次のような点が考えられる。

- ①地域全体を巻き込む活動であることがあげられる。従来、ほとんどの人が今日の活性化を期待していなかったほどの訪問者があり、連日お祭り状況になり注目されている。これらは全て市民の活動であり、失われたといわれるコミュニティの今後のあり方にヒントを与えてくれるものを感じさせる。
- ②まず学習からスタートして、地域資源、人材などが総合的に活用されていることがあげられる。たとえば、名物になっている弁当は、地元で実施した研修でのワークショップで考案されたものである。地域の食材を生かした点が、対外的な評価を高めている。
- ③嘉例川駅については、全国紙でも大きく紹介されており、全国的な生涯学習事業として評価されている。雑誌新聞などマスコミでも取り上げられており、対外的な評価が高まっている。観光客、訪問客が増加しており、地域の人々の意識も変わり積極的になっている。
- ④行政も積極的に市民活動を支援する姿勢が見られる。対外的な対応としても、嘉例川駅が全国的に知名度が高まりつつあることから、教育委員会や観光課など町当局も協力している。
- ⑤行政のスタッフの一部は、市民ボランティアの一員として参画し、活動しており、今日まで継続している。

(4) 地域の発展のために住民がしたこと

住民たちの活動の具体的な内容をあげてみると、駅周辺の清掃から、植栽、花壇作り、駅舎の補修など、多くの活動の種類があるが、これらを大別すると表2のような分類になると思われる。

(5) 住民が変わったと思われる部分

これまでの嘉例川の住民の活動は、地域民に広がるとともに、各種のイベント等を通じて、それぞれが地域にかかわる場面があり、大きな高まりを見せている。特に、地域の人々からの意見では、次のような点が挙げられた。平成20年5月「平成薩摩単人塾」が、嘉例川駅前の中福良公民館で開かれた。そのときの住民の発表及び教育委員会で、また市民ボランティアやスタッフの発表を元にまとめてみると以下のような点が変わったと報告された。

○地域づくりに自信、過疎を克服したという対外的な評価、

表2 住民活動

活 動	活動の具体的な内容
①環境美化活動	駅周辺の清掃, 植栽, 花壇作り
②資源保存の日常的な活動を継続	駅舎の清掃 駅舎の補修, 展示・表示
③地域の活動計画の策定と推進	地域行事の策定 イベントの実施, 協力
④まちづくりに関する学習	公民館事業への参加, 大学連携事業への参画
⑤活性化のためのボランティア	ボランティア駅長, ボランティアガイド
⑥地域資源の活用	駅舎の改修, 史実の調査 温泉との周遊バスの運行
⑦特産品の開発	ふれあい館の事業 駅弁「百年の旅物語～かれい川」
⑧地域の売り出し	全国紙・読売新聞日曜版, 週刊コミックマンガ テレビ旅番組 全国紙
⑨観光資源のネットワーク	地域資源の調査 観光マップづくり

駅弁人気などにより自信を深める

- 積極的な情報収集する姿勢, 学ぶ姿勢 研修等に参加する人などが増加している
- 「活動の内容」の項目は, 住民が, これらの多様な経験をしている
- 積極的に地域に生きる誇りが芽生えた。全国的な知名度によって地域に生きる誇りと望みを持った
- 自然環境保護や, 文化財保護の思想が芽生えた。古い駅舎が文化的な価値を持ったことで文化財保護の重要さ, 成果上の恩恵, などを実感している
- 教育文化, 生涯学習推進に関心が広がるとともに, 行政との連携を積極的に図っていくことを理解した

4. 市民を主役にする行政の役割(考察) 住民と行政は何をしたか

(1) 行政がしたこと

嘉例川地区の活性化に関する住民活動に行政が関わった項目を整理し, それをまとめてみると, 次の①～⑥の項目になる(表3)。これらは行政でできることであり, 住民では比較的困難なものが挙げられている。

表3

①学習機会の提供 リーダー養成を含む	指導者としての研修機会を設定 地域アニメーター講座
②活動環境の醸成 情報の提供を含む	各種委員会の設置 住民に対する広報やパンフレット配布
③連携事業の推進	生涯学習まちづくりモデル事業 まちづくり塾実践塾実行委員会
④施設の購入	(JRと直接交渉することは, 自治体としての取り組み)
⑤対外的に広報などを担当している	観光業者との広報 町のパンフレット作成
⑥各々の事業は, 一貫性を持って相互関係を持たせていること	嘉例川駅周辺活性化研究委員会の組織化 地域住民に対する理解と支援

⑥については, 行政の支援担当者の優れた力量や意欲が求められる。義務的な仕事ではなく, いわゆる生きがいでなくても行うような人材が行政にも求められる。

(2) 行政作用【働きかけ】と住民の活動の関係図

図1は, 住民が次第に成長し, 変化していくときに, 行政はどのように関わったかについて, その関連を表したものである。

くりかえすことになるが, 「市民が主役」を謳うためには, 行政としてはなんらかの工夫をしなければならない。行政の役割は, 市民が主役になるように支援することである。

(3) 行政作用【働きかけ】と住民の活動の関係

住民の生活に対して, 行政がどのようにかわり, 住民はどのように変化したのか, 前記(2)の関係図(図1)を元に, 変化の状況を, 以下に考察してみたい。図の丸数字(項目)にそって述べている。

①地域の問題

嘉例川地区は, 公称人口250人程度といわれている。しかし実態は, 地域に在住せず町内の町場で生活する人も少なくない。地域に横たわる課題として, 過疎化, 高齢化など地域の沈滞化がすすみ, いわゆる限界集落を思わせる様相の生活であった。かつて嘉例川地区は町内でも最も過疎のすすむ地域で, 商店や, その他の福祉学習施設など, 地区公民館が代わる程度であった。JR嘉例川駅も, 当然, 住民にとっては唯一の交通手段である。

いま, あらためて活性化しつつある嘉例川であるが, 長期的にどのようにコミュニティを形成していくかについての議論をされるようになっていく。

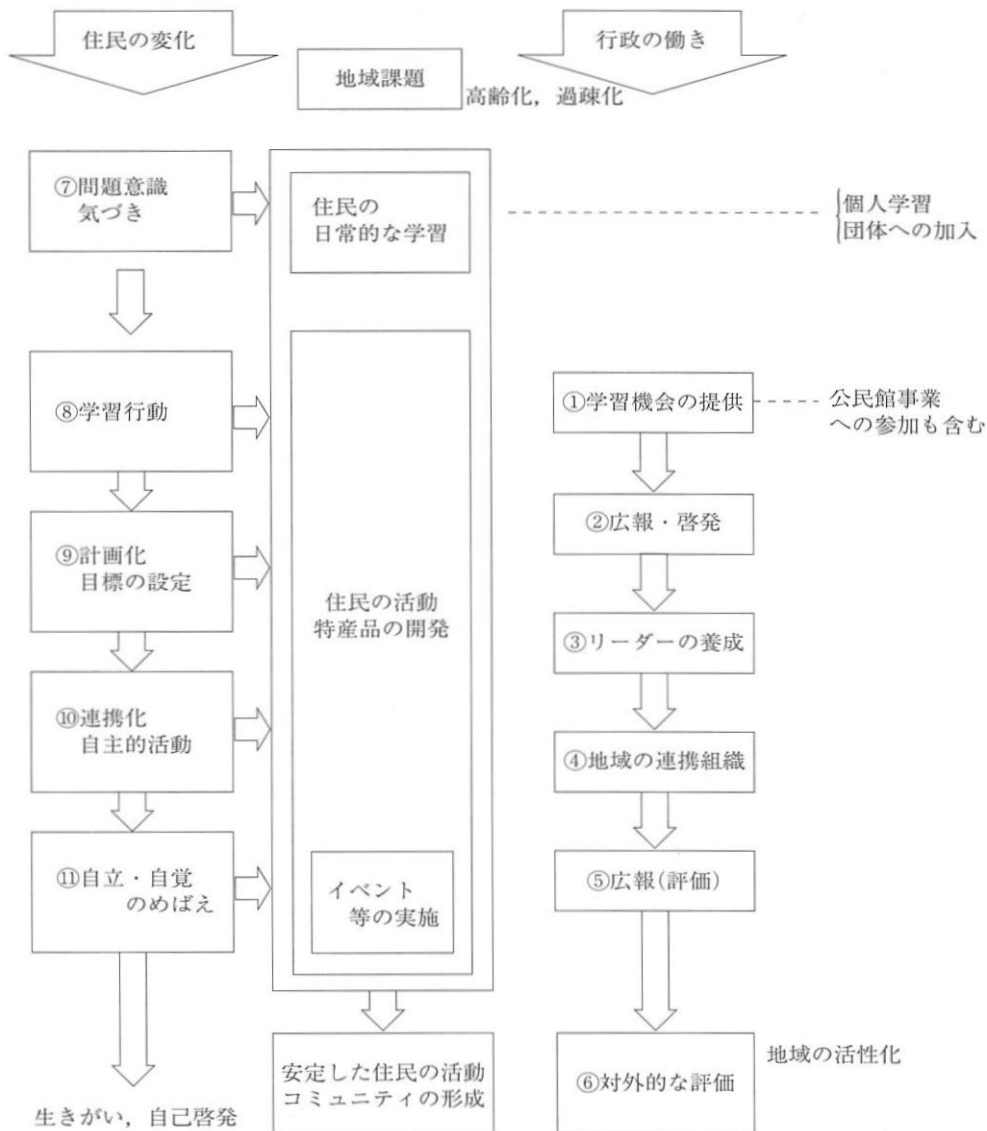


図1

②住民の一部の日常的な学習活動

住民は、農業が主であるが一部は勤務者である。住民は、職場での学習を初め、個人の生きがいに関する学習をする人や地域婦人会、老人会、エコミュージアム研究会などの、団体を通じて学習をしていた。

③住民は、行政の事業等にどの様に反応したか

項目① 公民館の学習は、中央公民館のほか、地区公民館等で、様々な学級講座が開設されており、それに参加する住民も少数であるが存在する。

公民館は、「きらり隼人発見講座」など、生涯学習、まちづくりに関する講座などの学習機会を開設し、町民に参加を呼びかけた結果、多くの町民が、まちづくりやまちの「宝」に関する認識を深めた。「嘉例川駅」が地域遺産であることに気がつく。

項目② まちの広報や、地元紙では学習の様や成果が広報された。地域づくりに関心が高まる。

広報は、市民の意識を高める役割を果たすとともに、取り組みの本格的な姿勢を築く元になる。

学習に参加した地区の有志は、今後の取り組みの必要性や方法について話し合う。

項目③ リーダー養成事業 地域アニメーター養成講座を実施している。

項目④ 地域全体に連携組織を創った。大学と公民館、地域団体と公民館、国立高等専門学校と地域の団体などとの連携組織を、行政が召集し構築した。地域だけでは不可能な点については、観光協会、公民会(自治組織)などとの連携組織によってより幅広い情報と協力が得られる素地が生まれる。

- 項目⑤ 住民が、独自の検討を始める。特産品の開発や地域環境の整備、駅舎の活用等について、検討し実践する。
- 項目⑥ これらの住民の活動は地元新聞やテレビ等で報道される機会が増えてきた。いわば社会的な評価を得たということであり、住民には大きな励みになったものである。さらにそれは次への飛躍の第一歩となった。

(4)市民の動きに関する考察

一般的な市民生活、平常的で地域に対する活動は、ひっそりとした過疎の集落の生活であり、谷あいの小さな畑で農業をしてささやかに生きているというのが一般的なイメージであった。

●は、その時期に、効果があったと見られる行政の果たした役割を付記したものである。

①問題意識のめばえ、気づき

項目⑦ 前述の通り、一部の住民は、町場にある公民館等で学習するほか、社会教育団体等で学習している。その中から、地域に関する課題と解決方法などに関して、学習している人が現れている。それはさらに、学習機会の必要性を感じる人びとを地域に増やし、より学習への要求を高める役割をしている状況である。

●行政としては、地域や団体等を刺激するような広報が効果的である。

②学習活動に参加する

項目⑧ 公民館事業や、他の自治体の事業に参加する人が地域に増えつつある時期である。自治体による学習機会の提供によって、地域に具体的な問題意識が芽生えた時期であり、さらに綿密な広報、啓発事業に効果が見られる。

●効果的な広報や、啓発の行為が求められる。

せっかくの学習機会の提供も、参加を求めている情報が届いてない場合は、効果が半減する。嘉例川地区は、人口も少なく、このような学習機会には参加してほしい人や、希望している人は比較的わかりやすく把握しやすいものである。

③地域活動の計画化、目標の設定と明確化

項目⑨ リーダー養成講座の実施として、NPO法人全国生涯学習まちづくり協会が主催する「地域アニメーター養成講座」を町公民館で実施した。その中に、嘉例川地区からも数名が参加していた。この中では、地域づくりに関する研修や、計画作りのワークショップが行われた。その中で、アイデアを出して地域の特産を創る案などが出された。これらの学習体験から、住民たちは独自に地域に様々なまちづくりの仕掛けを実践している。いわば

個人としても、地域としても、計画化や目標を明確化する段階にある。この段階になると、何かが地域に起こるという雰囲気が生える¹⁴⁾。

●地域で具体的に実践すべきことを明確化する。その目標達成のために、関係者が一体化して具体策をたてる支援が必要である。

④連携化と自主的活動の活発化

項目⑩ この時期に、本格的なアイデアや、間髪をいれずに関連団体との連携によるイベントを実施することはきわめて効果が大きいものがある。嘉例川で言えば、嘉例川地区活性化研究委員会が発足して、その研究やイベントなどが平成16年(2004)以後、駅舎を中心に活発に展開されている。それらは、いずれも地域の一大ニュースとして広く広報され、中には全国紙で取り上げられるものも生まれたのである。これらの繰り返しによって、住民には自信が芽生え、サービスする心、もてなしの心も芽生えているように思われる。

●行政としては、地域や団体の自主的活動を支援できるように、日常的な連携、連絡を図れるような体制を築いていることが必要である。

⑤自立・自覚のめばえ

項目⑪ 嘉例川住民の多くは、大勢の人々が嘉例川地区に押し寄せている現状については懐疑的である。「このままで必ず、悪いときが来る」とリーダーたちは言う。いまは地域外の要因の力によって大半は動いているという自覚が見られる。JRをはじめ、観光協会、新聞社、出版社などが嘉例川を訪れるようになってきているのは、一方では、多くの団体との連携を図り、それらが成功しているからに他ならないのである。しかし、そうしたなかでも、筆者も参加した駅前の中福良公民館での研修には、約50名の住民が集まった。かつてこれほど地区住民が研修に参加した例はないというところを見ると、住民の意識がかなり高まっていることを示しているのではないだろうか。

(5)住民の活動に対する行政の機能

行政の機能からすれば、図1の①～⑤が、地域住民の活動に作用している。実際には、事業として実施したなかの、学級・講座の開設費や、外部委員の委嘱の経費、リーダー養成事業費などについては、公民館事業予算として計上されている。ただ直接的に嘉例川駅活性化の事業としての予算は見られない。強いていえば平成15年(2003)の駅舎購入である。

反対に、まったく情報がなく、知的な要求もない地域の

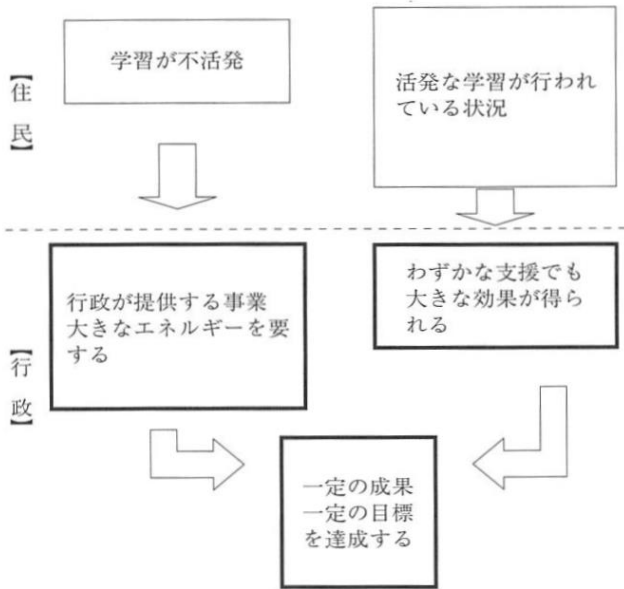


図2 一定の効果のための住民の啓発と行政の力(事業の効果)の関連図

※枠の大きさがエネルギーの大きさを表す

場合、行政の作用(支援作用)としては、一定の効果을あげるためには、行政はより多くの労力を要する(例えば、動機付けのための基礎的な研修、具体的な指導などに、より長期の期間、時間、予算など)。本来の住民の学習力が存在している方が、少なくすむ。したがって、市民の学習を重視することがより効果があるものである。筆者が関わった自治体で紹介している事例の多くはこの部類に含まれる。

したがって、学習風土が停滞している地域には、それ以上の行政の指導力が求められているが、逆に、行政が弱いために学習風土が停滞しているというのも事実である。かつて、「町をなんとかしたい」という若者が現れたとき、「エコミュージアム」を示唆したのは筆者であるが、その後の発展を考えれば、これは突破口の一つとなったと思われる。このことから、一人の意欲あるリーダーの出現と学習が、大きな意義を持つことがわかる¹⁵⁾。

4. まとめ

今後の具体的な方策と、行政と市民が相互に期待することとしては、これまでの市民の活動からすれば、嘉例川の事例を待つまでもなく、次のようにまとめることができるのではないだろうか。

(1)市民の自主的な活動は、行政の効果的な支援でさらに発展する

事業の適時性や規模も大きな要素であるが、「学習機会の提供」「リーダーの養成」「情報の提供」が効果大きい。

特に、市民の学習が容易になるような学習環境を整えることである。具体的には、「学習機会の提供」であり「指導者の養成」である。そのための支援をすることを意味している。さらに、それは「施設の整備」や「学習機会の提供(場の設定)」であったり、指導者の斡旋であったり、情報の提供なども該当する。

(2)外部の評価や、適切な団体、企業等を連携させることは効果が大きい

外部からの示唆や指導、評価が地域を育てることは知られている。わずかの意思のある人がいて、それが発火点となり、火の手が広がる可能性があるとするれば、それは外部からの情報であり、刺激となることがある。

(3)限界集落と思われる地域に対する支援が、効果をあげるためには、以下にあげるような一定の条件が必要である

①まちづくりは人づくりである

まちづくりの終局の目標は、人間的に生きる、人間形成に資することである。したがって「まちづくりは人づくり」はそのことを表しているのである。そのためには、優れたリーダーを養成することの必要性もあらわしているのである。

②市民の学習を支援すること

市民を育てることは、行政の役割でもある。直接ではないが、である。市民の活動を側面から支援することこそ、行政の最大の任務であろう。市民の中に行政職員も市民として参画することは当然である。嘉例川の活性化にも行政職員が、住民として参画しているのである。

③市民団体を育てること

市民の学習を支援するためには、市民団体を育成支援することである。市民が主役のまちづくりのためには、創造的な取り組みが必要で、そのためには、例えば、市民団体そのものが存在し、充実することが重要である。地域活性化の団体・塾などの自主的な市民団体は、時には行政より専門的な情報をもっている場合がある。しかもボランティアとして活動しているだけに、社会的な説得力も強い。こうした自主的な地域の団体と日常的に連携を図るとともに、これを育てることが行政の役割でもある。

④市民とパートナーシップをとること

行政と市民がパートナーシップをとり、多様な事業を展開することが理想的である。例えば、NPOは行政と市民をつなぐ団体であるが、これらがパートナーシップを発揮し、その接点にたつことも、今後の大きな期待である。パートナーシップをとるためには日常的に情報を交流し、相互に深い信頼関係を築いていなければならない。

⑤まず、職員の研修が必要である

自ら研究会等に参加したり、グループ研究するなどの意欲が求められる。自治体によっては、中央省庁や、研修機関、民間事業所で研修して意識改革を図っていた例もある。職員の自己研修はもちろん外部研修などにも積極的に関わる姿勢が必要である¹⁶⁾。

注

- 1) 聖徳大学生涯学習研究所紀要「生涯学習研究」第1号 平成15年3月
- 2) かつての掛川市、八潮市、茅野市などの有名な都市は、ことごとくその体制が変わりつつあるといわれている。
- 3) 聖徳大学生涯学習研究所紀要「生涯学習研究」第6号 平成20年3月
- 4) 下条村、海士町、矢祭町などは、「過疎を克服したまちを報告」(TBSテレビ12月14日)
- 5) 「教育基本法第3条」と中央教育審議会答申「生涯学習の基盤

整備について」平成2年1月

- 6) 「生涯学習まちづくりの方法」福留強著 日常出版 平成15年11月 p.99
- 7) 聖徳大学生涯学習研究所紀要第6号 平成20年3月
- 8) 聖徳大学生涯学習研究所紀要第6号 平成20年3月
- 9) 聖徳大学生涯学習研究所紀要第6号 平成20年3月
- 10) 「創年時代」17年8月 p.55 平成17年8月 NPO法人全国生涯学習まちづくり協会
- 11) 「霧島市観光基本計画」平成19年5月 p.157
- 12) 「生涯学習まちづくりの方法」福留強著 日常出版 15年11月 p.99
- 13) 「地域政策調査研究報告書」 「生涯学習通信p.99」 全国生涯学習市町村協議会
- 14) 全国生涯学習まちづくり協会及び地域アニメーターについては紀要第6号で詳細に述べている。
- 15) 「南風人館」の設立、発展はそのことが基点であるといわれている
- 16) 長野県下条村では、全職員が民間の企業(物販業)で店頭に立つ研修を義務付けた(TBSテレビ12月14日「サンデージャポン」)